一型橋舟

舟橋聖一

新潮社版

日本文学全集　31

舟　橋　聖　一

発行／1967年9月15日　十一刷／1969年9月25日
発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代)　振替東京808　郵便番号162
印刷所／石福印刷株式会社　製本所／大日本製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社　製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1967

目次

ダイヴィング　五
木石　四一
悉皆屋康吉　六九
雪夫人絵図　二三五
注解　四八七
年譜　四九三
解説　亀井勝一郎　五〇七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

舟橋聖一

ダイヴィング

一

碓氷はこの頃めっきり肥えて、女性的に見える肘を立て、のみさしのアイス・ラスベリイのコップの氷を、ガリガリと匙でつついた。何か言いそうにして、なかなか言い出さない。すると窓を通して、切り込むように光る稲妻が、白いテーブル・クロースの縁をピカリと青く掠めていった。夏の夜の銀座の街には、西の方から雷雨が近づいて来ていた。

「よろしい。それで仕事の内容はまずわかったわけだ——ところで一つききたいことがあるんだが」

と、しばらくして碓氷は口をきった。

「勿論、君がほんとうに腹をきめて、今までのような中途半端な気持でなしに、一人立ちの男のする仕事としてやっていこうというならわたしはそりゃ五万でも十万でも君の必要なだけの金を出すことに、否やはないんだ。しかしわたしが一番懸念している事は、その仕事が果して君の性に合っているかどうかという点だがね。つまりあけすけに言うなら、君は一体文学の方は、どうするつもりなのだ」

「文学？」

「そうだ。そいつがわたしの一番訊きたいところなんだ」

「文学といっても僕は今なんにも書いてはいないんだがね」

「しかし……」

「勿論文学は何んとしても僕の素質ではある。けれども金の方の問題は抜きさしならぬ現実として僕に攫みかかってくるんだから、うかうか文学を口にしてはいられぬほどさしせまった容態なのだ。加之もそういう現実の中にも文学はちゃんとあるのだ。僕はそう思い、二つのものを別にそんなに区別しては考えていない」

と、竜二は答えた。だが、それは碓氷をほんとうに

納得させるような理論的な説明ではなかったので、碓氷は不相変匙でアイス・ラスベリイのコップをかき回しながら、暫くたって又言うのだ。

「わたしはそりゃあお金は持っていないこともない。けれど、その金を何かちゃんとしたことに使いたいのだ。いい加減な、お先き真暗なことには使いたくない」

「つまり儲かる仕事にというんだな、君のいう意味は？」

「と、とんでもない」と碓氷は誇張的な目をむいて、「いくら先が見えていても、儲けるために儲けるようなな、そういう仕事は大嫌いだ。金に金を生ませることなんざ、わたしは何の興味もない。そこは君、誤解のないようにありたいものだね」

と、こんなとき、碓氷の顔にはありありと傲岸な感情が浮び出るのだ。

「そこで前へ戻るが、このごろは又文壇も賑わっているじゃないか。文芸復興といわれたり秋には新しい文芸雑誌が一つ二つ出るという噂を聞いたんだが、君も何か書いてみたらどうなのだ」

「まあそのうちに何か書くよ。今は書けない。今のような俗っぽい仕事をやっててはね」

「このごろ本は読んでるかい」

「本？」

「フランスあたりの小説。ジッドやヴァレリイのものなんかさ。それからドストエフスキイなんかが、又研究され出しているじゃないか。君も折角学校を出て、ここまでやって来たんだ。今になって、弱音を吐くのは、つまらんじゃないか」

「別に弱音を吐いてはいないよ。しかし……」

「弱音でないなら、もっと、ぐいぐいそっちの勉強をしてはどうだ。その方が君にしたって生き甲斐があるんだろう」

「……」

「ハックスレのポイント・カウンター・ポイントは読んだかい」

「読んでない」

「読み給え、あれはいいものだ」

「そういわれると、まるで僕は読んでいないね。尻から追い立てられるような気がする」

「そんなに焦せる必要もないさ。しかしジョイス、ロレンスなぞと、読むべきものは沢山あるね。そうそう、チャッタレ夫人の恋人なぞは、君がもっとも読むべき種類のものではないかな」

「……」

「往年の意気はどうしたんだ。トラアやカイゼルの戯曲を貪るように読んでいた君の面影はないじゃないか」

と、碓氷はすっかり高飛車に言い放ったが、

「こんなことをわたしが言い出すと、君の心には気の毒なほどの動揺が起ってくる。つまりそれだけ、君はまだ、文学に執着を残しているといえるんだ。——君がいつまでも勉強もしないで、君のいうその素質を生かし育ててゆくことをしないのは、矛盾だよ」

「そりゃあ、僕だって好きな勉強をして、無事に日が送れるなら、それに越したことはないんだが……しかし、少し手を抜いてると、すぐに仕事の重圧がのしかかってくるのだ」

「仕事、仕事といっても要するにそれは本質的には君の仕事じゃなくて、亡くなった君のお父さんの仕事なんだろう。少くともその延長でしかない……」

「そりゃいうまでもなく父親の仕事なんだ。しかも父はその仕事について、兄には一言も相談しないで、僕にあてがっていったのだ。僕が売れもしない小説を書いて、学校を出てからも、愚図々々していたものだから、将来の生活的安定を与えるつもりで、僕にそんな仕事を押しつけたのが、抑々のはじまりではあるが、今ではそれが僕の人生の大きな負担になり、同時に津乃木一家の浮沈に関する問題として先鋭化して来ているんだ。本質論だけでは、こうした現実は解釈がつき兼ねるのだと思う」

「しかし何かそこに本格的でないものが隠されているというような気持は、第三者が感じられることだ」

「……」

「勿論わたしは決して出し惜しみをしているんじゃないぜ。それから長太郎君に悪く思われまいとする考えからでもない。わたしはむしろ何か有意義なことに金を出してみたくてムズムズしている位なのだ。だから出すのは何でもない。若し是が幾何かでも私の出す金によって、君がその内にもっている力を、立派に活か

す事が出来るという様な場合だったらね」
「それは兄とは違う。兄は一種の消極的な守銭奴だから。守銭奴といって悪けりゃいつまでたっても幼稚な感情に支配されている意地っぱりだから――。しかし、僕にとっては何といわれても今、金、金が欲しいのだ」
すると、碓氷は肘をあげ、竜二の視線の直射をさけるように、グルリと四囲のテーブルの客を見回してから、腕を組んだ、その格好が、兄の長太郎によく似ていると竜二は思う。長太郎も困った問題に出くわすと、視線を外らして頑固に腕を組んでしまうのだ。竜二がいくらしゃべっても、押し黙ってしまって口を開かない。そのうちに感情的になり、次第に亢ぶって来てヒステリカルになる。そういう時の長太郎の論理的根拠というものは、きまって父親が母や母方の叔父や自分に何一つ相談もせずに、勝手に次男の竜二にあてがった仕事なのだから、今更自分の責任ではないと、ただそれ一方で亡父への反感をマキシマムに露出するのが常なのだ。
長太郎は学校を出るとすぐS・S商会に勤めて、今では庶務課長の椅子を占めているのではあるが、就職匆々、九州の方の出張所へやられ、それから十年あまりの間、あっちこっちと田舎回りをさせられているうち、晩年の父親が、無理な金を借りて、俄かにやり出したその仕事には、全く一顧の相談も受けずにしまったのである。仕事の目的はS―地方の健康住宅地の開発で、何万坪かの土地を買ったばかりでなく、CとEの二駅からS―へ通ずる省線連帯の特急バス専用道路をこしらえるという大がかりな事業だったが切取工事を一通りだけ完成したところで、突然父親が倒れてしまったのだ。父親の指図でもあり、はじめは道楽半分に手伝っていた竜二は、父の死と共に自然の勢いで、その仕事の全責任の前へ押し出された。長太郎は、資産のうちの最も安全な部分を獲得すると、会社の方は、竜二に全部をなすりつけるようにして、その仕事とは一切没交渉の姿勢をとった。とんでもない。それはみんな親父と竜二と二人で無断でやり出した仕事なんだから、俺の知ったことじゃない。そんな仕事にかかり合って、俺が俺一個の汗と腕で築いて来たこの地位を失うことは出来ない。俺は親父のお陰にはこれん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ばかりもなってはいないのだし、親父も亦俺を愛してくれてはいなかった。親父の竜二贔屓というものは、少年時代からいつもそうだったのだ。親父は必ず竜二の肩をもち、俺を意地のわるい目付で、脅したものだ。俺は津乃木家の相続人ではあるが、S—住宅株式会社の責任者では少しもない。その代り会社の株は、全部竜二にくれてやるから、更めて竜二の仕事としてやってみたらよかろうというのが父親の新しい位牌の前での長男の宣言だった。だが、引受けてみると、会社の資産内容は甚だしい惨状を呈していて、業績も低落する一方なのだ。尾根や崖を切りひらいたアスファルトの専用道路を、特急バスは通りはじめたが、住宅地の分譲は、世のインフレの好況に乗ずる所ではなく、まるでハカがいかないのだ。竜二は、碓氷のいうように、一方に文学の仕事を持っている。死んだ父親は、長男の、何故か自分になじまないひねくれた性質を憎むのと同じに、次男がとり憑かれた文学というやくざものを恐怖していた。竜二はいい男だが、あの文学、文学が敵じゃよ、と父はいつも言い言いした。父は正面からそれを圧迫することの非を悟ると、こんどは策動的に出て、竜二の小説の売れないのを幸い、無理矢理に住宅地の仕事に関係させたのである。

だから、碓氷のいうように、この仕事が竜二にとって本格的な仕事でないことはわかっている。竜二の小説が一つ二つ売れるようになったので、余計この矛盾は際立って来た。こんどのことでも、ほんとうのことを言えば、竜二はこのヂレンマをちゃんと整理してから碓氷のところへ相談を持ち掛けて来ているのではなくて、彼と相談した結果が、或はこのヂレンマを清算することが出来るような情勢に立到るかも知れないと、その程度の漠然とした考えを持って来ているのだった。それは自己に対して不真実のことだったが、碓氷が若し無条件に金を出してくれれば、勢いその仕事にかかり切りにならなければならぬから、他動的にしろ自分の態度というものがきまってしまう。文学を捨ててしまうというのではないが、当分の間、文学なぞをやっている暇のないのは明かであった。それに金が欲しいという事実は、焦眉の急に迫っている。長太郎が堅く財布の紐をしめ、母親の取分まで一々監視付きで、頑として竜二の方へ融通を拒絶している以上、外

に気楽に金を貸してくれといえそうなところは碓氷しかなかったのだ。

碓氷は徹底したヂレッタントであり、もとは竜二の文学上のペトロンとして、竜二には大切な友人だった。二三の商事会社に監査役か何かで関係している外は、書斎には文学・美学・芸術学・考古学・民族学、その他広く一般史学・哲学に関する著書が充満して居り、最近は又ゴルフに熱狂して、座敷の中に、細長い絨毯のグリーンを設けて、室内用のパッタイング・デスクを置き、ひまなすきがな、パッタイングの練習をやっている。金は親譲りのが、相当あるがその金の使い途に迷っているというのだ。たとえば彼は百円の金は正味百円に使いたいという男である。百円の金を百五十円に使えば吝嗇だが、五十円にしか使わずにとられてしまうのも愚昧だと考えているわけだ。そんなことから、金のある人の通有で、人を信用したがらない。いつも要心ばかりしているので、結局ほんとに金を使うことの出来ない男でもあった。しかし竜二にすれば、碓氷は亡父のことも知っていれば、長太郎の気心にも通じて居り津乃木一家の事情にも明るいので、少し立入った話でも彼ならば出来る特別の友人関係にあるのだ。その代りにはわかりすぎているだけに話が内側へ潜っていったり、話の糸の小さな結び目に引っかかってしまったりすると、それから先へどうしても抜けていかないようなこともあった。

今日も話が縺れかけていたが、外からは近づいてくる雷雨の前ぶれが、苛立たしい気分を運んでくるし、店の客も何となく落ちつかず、二三組バラバラと立ってゆき、竜二もいい加減に話を切り上げようと考えていると、碓氷は思い切って人を食った沈黙から、腕をほどいて、

「そこまでせっぱつまった現実にのしかかられているのだとすると、理屈は抜きにして、こりゃ考え直さなけりゃならん。よろしい。重役会議の結果が、いよいよというどん詰りに来たら、私も一膝のり出して上げよう」

「ありがとう。――君の忠告はよくわかったし、僕も自分の人生に対する希望は全然失っているんじゃあないのだが、会社のこの危機を切り抜けてみなければ、何んとしても態度をはっきりさせる余裕が出てこない

のだ」

だが、碓氷は気六カしい顔を俯けて、コップの中の残り汁を、ヂュウと音たてて吸うのであった。

乱暴に入口のドアがあいた。

黄色い立襟のブラウスに、崩がかったストロオの帽子を冠った江島逸子が先に立ち、うしろに三人の男がつづいていた。逸子はすぐ竜二の姿を見つけると、悪いところへ入ってしまったという瞬間の表情を示したが、今更引込みもつかないといった羽目で、真ん中の卓に向っていった。

逸子は自分たちの卓をきめると、すぐツカツカとやって来て、

「暫くね、いかが、御元気？」

と、竜二の前に手をさしのべた。立襟の間から、女の華奢な、白い咽喉が、のぞいている。

「あんまり元気でもないんだが――」

「このごろ書かないじゃないの、ちっとも」

「――没落作家だもの」

「不相変、意地っぱりね。そんなことといわないで、何でもジャンジャン書く方がいいわよ」

そう言って笑いながら、チラリと碓氷の方へ流す視線には、この人独特の色気があった。

又、強く稲妻が光った。

「夕立がくるわ、もうすぐ」

と、女は却って碓氷の方に向っていい、くるりと背中を向けて去ると、しばらくして碓氷が聞いた。

「どういう人なの、あの女」

「江島逸子といって、何んということなしに、いろんな事に興味を持ちたがる女さ」

「へえ、あれが江島か。道理で、あの男の中の、向って左にかけているのが、佐々というジャアナリストだが、やっぱり噂だけじゃないのだな」

「噂って何だ」

「佐々とある夫人との醜聞だよ。江島逸子という名前だけは前から聞いていたが――」

碓氷はそう言って女の方をふり返った。女もジッと碓氷を見返したようだったが、やがて男たちを相手に、あたり憚からぬ賑かな笑い声を立てていた。

だが、竜二はそれをきいて、心臓の黒い古創がチクリと痛み、やっぱり可厭な気持になった。未練も想出

も何んにもなくなっている筈の女であるのに、ちょっとでも心の平静が破れるということは、全く腑甲斐なくもあれば、低俗な根性でもある。相手が佐々だというので、竜二は余計に味気ない気持にさせられた。彼は四五年前の抬頭期には、華々しい左翼評論家であり、月評なぞで竜二をこっぴどくやっつけたりしたこともあったが、いつのまにか、円転滑脱に転向して、今では某雑誌社の編集に携り、才知に富んだジャアナリストとして売り出している。今までの逸子をめぐる情夫たちより、佐々はいろんな世間をわたって来ているだけに、度胸が出来ていて、逸子の相手としては決して役者は下ではないが、それだけに又、竜二には面白くないものがあった。

人間というものは、何んという勝手な我儘者であるのだろう。別れて既に五年にもなり、その淫蕩な追憶を、すべて若気の過ちとして清算し、寧ろその古い秘密を怖れている。——幸いにそんなに目立って噂にもひろがらず、若い頃の情事として大へん手際よく成長し消滅していったので、それからあとも、たとえどんな機会が、再び二人を接近させても、決して焼木杭を つつくようなことはしまいと心に決している位で、——自然、このごろでは逸子に逢っても、極めて虚心坦懐な態度で、言葉をかけたり、かけられたりする境地まで来ていたのに、こんな噂話の刺激が、意外に神経を脅かすのには、竜二も呆れた。呆れながらも、しかし嘗てやきつけられた印象は、彼女の閨房のコケトリイを、この瞬間まで、またまざまざとうつし出してくるのである。その一々の小さな微妙な癖までが、何故か竜二を駆り立てるようにする。——一種の嫉妬に違いなかった。

二

竜二は碓永とわかれると、妻の沙代と逢う約束の時間が近づいていた。

街には西の方から逼ってくる毒を含んだ雲が、雷雨に先立つ暴慢な風を送り、百貨店の旗・劇場の提灯・柳・スカーツ・足、そして舗道の塵埃を吹きとばした。

——ショウ・ウインドの硝子を割るように光る雨滴の線画、前をゆくショップ・ガールの小麦色の腕に落ちてくる水玉、と見る間に、叩きつけるような激しい

驟雨だ。

竜二はビルヂングの壁に沿い、その雨の中を西銀座の方へ抜けると、アカシヤの影に身を庇った。

沙代をのせた車はなかなか来ない。空は垂れ下るように暗く、閃光はいよいよ強く白い。そして彼は強雨の中に立っていたが、今逸子たちからうけた刺激は、一向に彼の心から洗い落ちていかないのだった。

その頃は、逸子はある音楽家の妾であったが、竜二はKという先輩の小説家のサロンで彼女に紹介された。やがてKを先頭にして、Kの家に寄り合う若いものたちの間に、雑誌の計画が持ち上ったとき、竜二も逸子も、その同人として名を列ねた。雑誌はその当時の新しい文学運動の気運をつかまえたために、創刊号からして、売行もよく反響もあった。斬新で奇抜なスタイルを持った詩や小説が書かれ、ここに集る若い作家たちは、ほんとうにのびのびと、青年作家の喜びを満喫し、明るい理想と情熱に燃えていた。プロレタリア文学拾頭以前の文学の花園には、極めてのんきな夢と希望が輝いていて、今のような世知がらい不安な空気なぞはなかったのだ。また若い作家たちである彼らは、既成文壇に認められようなどという料簡は持たず、どしどし自分たちの仕事をしてゆけば、それで十分に意義があるのだという自信にはり切っていた。況やジャアナリズムに迎合して、甘ったるい作品を書いてみようなどという考えは、誰一人持ち合してはいなかった。彼らはそれで食えようと食えなかろうと、文学をしないではいられない人たちであり、その胸懐には自由と創造の精神を高く持していた。

竜二の書いた戯曲は、やがて新劇団の脚光を浴びた。友人の演出家Hによって新しい舞台的構図と感覚的な台詞と粘液質のニュアンスを特徴として、今までにない異色のある演出が組立てられたりした。これらの外部的刺激によって、雑誌の気勢は上り、新文学精神が高揚された。毎週のように同人会や編集会議が開かれ、同人はみな出席した。活発な議論が闘わされ、新しいプランが次から次へと提案された。竜二は一年もしないうちに、文壇の新進作家として目され、原稿料のとれる雑誌に小説を発表したりする好運をかち得たのである。

一年近くの間、江島逸子とは同人会のたびに顔を合

せ、一緒に新劇団の見物をしたり、晩くまで友達の所で文学を談じて、深夜に二人で帰ったり、そのまま江島の妾宅へ泊りこんだりする間柄であったのが、どうしたはずみかに、急に二人の関係が深い処へ突きすすんでしまったのは、竜二の作品が漸く他の同輩を凌いで商品価値を生み出した頃の事である。

江島逸子は詩も小説も戯曲も書いたが、皆ものになってはいなかった。しかし彼女は男ばかりの同人の中にまじって女王のように振舞い、議論がとげとげしく険悪になって来る時でも、彼女が交れば、いつか皆の鼻いきが和ぎ、ある程度のジンリッヒな情態の中に保たれてしまうという効用があった。それだけでも皆は彼女を同人にしておく意味があったし、また女の方にしても悪い気持ではなかったのだ。

彼女は音楽も一通り心得ていたし、ダンスも出来た。三味線も弾けば、常磐津も語った。彼女は女のヂレッタントとして人並程度の才能を持ち、判断力もあれば、嗜好も知的であった。彼女は竜二の戯曲が上演された時、舞台裏で独逸の民謡を唄ったりもした。その芝居の楽の日に、竜二はもうプロンプタアの必要のなくなった舞台鼻のプロンプタア・ボックスへもぐりこんで、ひとりで舞台を見ていると、唄をうたい終った逸子がこっそり奈落から上って来た。せまいボックスの中へ、二人が半ば座をわけるようにして坐るとまあきれちゃったのと、声を立てずに口だけで言い、

「今ねえ、奈落にいたら、接吻してるのよ、人が見てないと思って」

「誰が？」

「今そこで芝居をしている二人がよ。芝居がほんものの恋愛になったのかしら」

そんなことをいいながら、逸子は竜二の肩に手をかけた。竜二は密着する女のからだに辟易し、芝居なぞはそっちのけになり、急いでそこを出てしまうと、逸子は追いすがるようにして、帰るなら今夜は一緒に帰ろうと言った。

その晩、街には深い霧が流れていたが、二人は劇場を出ると、何んということなしに、暗い方の道に向って歩き出した。

いつか道が川に出た。竜二は女に引きずられるようにして川に沿って歩き、また、幾つかの橋を、西から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com